

小さいので、これによつて心的状態を讀み取る事は困難な仕事である、各々の子供の性格をはつきり知るこいふことは教育的效果をあげる爲めの第一歩の大事な仕事である。兒童の父兄からもそれ／＼子供の性質なごの大體は聞き取るこゝが出来るが、家庭に於ける兒童の生活は両親、兄姉、弟妹の間に於ける生活であつて所謂縦の關係に於ける生活である。それに一般父兄には同年輩の多くの兒童との比較は出来難い仕事である。したがつて知能の方面でも、一般より進んでゐるのやら遅れてゐるのやら、普通なのやら、變つてゐるのやらはつきりわからぬものである。幼稚園に於ける生活は同年輩の間に於ける生活であつて、家庭生活では表はれぬ生活態度をあらはすものである。それにこゝでは一般兒童との比較も出来るので正しい批判を下すこゝが出来る。しかも手の行き届いた幼稚園で細かく觀察した材料は實に貴いものである。一期の中程になつて「ランドセル」を「グランドセル」に發音してゐる兒童を發見したり「ダイブツ」を「ライブツ」に發音してゐるのを見つれたり。兒童の發音上の事だけについて考へても五十人の子供を一人の教師が見て行くこいふこゝになるこゝ仲々行届きかねるのである。一日でも早く子供をはつきり知るこゝが出来れば非常な教育能率の増進を來すわけである。其の兒童の教育上參考となる様な記録を細大にかゝわらず學校への贈物として持たせて下さる事が最も望ましい事である。

保育についての二、二

東京市麴町小學校長

田 嶋 眞 治

幼稚園の保育を受けた子供の躰け方については、尋常小學に上つてから、よく一種の批評を聞くこゝがある。教師に對して慣れなれしいこゝか、教師の威厳を感じなくなつてゐるこゝか、我儘だこゝか、學習に對して深い興味を感じなくなつてゐるこゝか、清新さを以て學習に勢を出さないこゝか、一種の學校病に侵された者が多いこゝか、言葉遣ひが悪くなつたこゝか、是

等は幼稚園保育の任に當つてゐる者に等しく深い反省を試みねばならぬ事ではあるまいか。

同じ幼稚園にしても、その經營者及び保育擔當者の人格、識見、流儀、色調、經驗の深淺、保育に對する信念の厚薄、その幼兒の環境の善惡差別等によつて一概に片付けることは隨分無理な場合がある。けれども蓋然的に言つて見るに、右の様な批評に對しては、一應その關係者の側では沈黙默考に値する好個の參考材料であるに違ひない。たゞへぎの様な批評があるにしても、保育本來の價値は牢として動かないものであつて、ただ保育の仕方か、その環境さかの條件の如何によつて保育の價値に影響があるものだと思ふ。吾々は今すぐに環境を變化させることは出来ないから、保育本來の使命に幾度かの反省と熟慮をなすことが肝要ではあるまいか。

人は己れの仕事に幾何かの年月も、經驗を經るに、餘りその事については深い意義を改まつた氣持で考へて見る事に怠情なものだと思ふ。吾々は、相當の年月も經驗を經るに、その仕事に對して一種の體驗といふ實に尊い獲物を得ることは、非常に大事な事であるけれども、其の年月も反比例に、その仕事に對しての熱愛と清新さを感じるに薄くなり勝である。特に相手が子供であるから遂に簡單に考へて過ごすことが尠くあるまいと思ふのである。さうしても、清新な興味が續く時に初めてその仕事に熱が出來てるもので、その仕事にも實が入つて來るものだと思ふ。

保育者が、「自分が仕立てるにこんな物覺えが達者になるに、如何にも驕り顔にやつてゐるに、案外な子供が出來て來るものだ。子供は大人が想像以上に鋭敏な感受性を有つてゐるから先生が少し何か物愛しい氣持で、不精ぶしように子供に對してゐるに、子供は先生に對して興味を失つて、さつさ先生から離れてしまふ。それは何か童話でもしてゐる時によく表はれて來る事實である。先生が「これを一つ話して聞かせませう」と、その童話材料に對して、深い造詣と感激を有つて非常なる清新な氣持一杯で話し初めるに、たゞへ話し方は多少下手でも、何時もはなしに、子供達は先生の話にすつかり引込まれてしまふ。世の大家諸氏のお話の時、成程、そこだ、と深く考へさせられるこ

こがある。

幼稚園の保育は、或る意味から言へば、小學校の教育よりも、むづかしい事がある。園児が何か觀察して疑問が起つた時に發する問ひの中で「之れなあに」「どうしてゐるの」「どうして」。なご言ふ時に、教師の答へは中々困難である。

子供の問ひの形式は簡單であるからその問ひの意味が果して何處に存在するかを明瞭に突止めることが困難である。子供の問ひには、確實な答へを要求すると言ふ目的意識が漠然としてたゞ或る物に對して瞬間的に問ひの形式で表現しただけで、後の答へは必ずしも問ふ所に非ずさいふ底の問ひが尠くない。一度或る事を問ふてもその答を待つ間もなくまた新た事に著眼して轉々疑問が移動するこがある。初めの問ひに對して教師が答へるこその時は違つた事を考へてゐる時だから教師の答へは子供の心にびつたり響かない、言はゞ子供の心的活動の邪魔になる事がある。そこで教師は子供の問ひの内容を明かにすると共に、その問の要求の程度を、その答への速度等に深い注意を拂ふ必要がある。

或る珍奇なる動物なごを觀察する時に、驚きから求知慾になつた時には、明瞭に理解する様に答へてやらねばならぬ。子供は、教師の不完全さいふか、答への程度が高過ぎたり、低過ぎたり、子供の問ひの氣持を大なる隔りあつても、その隔りのある事を判斷する力がない時には、違つた答へをしても、簡單に自身の問ひに對して答へをして貰へたと言ふ丈で満足するこがある。その邊の氣持を明瞭に判斷するこは教師側の方で相當の子供の心理を理解するだけの力を經驗を有たねば出來ぬ適當である。

幼時期の子供に若しも事物に對して餘り疑問を起さないか、たゞ疑問が起つても、それをはつきり教師に尋ねるこが出来ない子供に遭遇した時には、餘程注意すべき事であらうと思ふ。さりて徒らだと思ふ程に、問ひの濫發をしたり、折角問ひを出しておきながら教師の答を必ずしも必要としない様な子供も亦注意すべきものであらう。